

忘れられないシベリア抑留

熊本県 内田 弘

私は昭和十九（一九四四）年四月、徴兵検査を受け、十月十四日、熊本一六部隊に入隊。その日、満州第一八部隊要員として、認識票をかけて夜中に車中の人となり、北九州門司に着き、ある民家に一泊した。民家のお母さんに大変よくしていただいたのが今も忘れられない。

翌朝、我々の一行一千人もいたであろうか、兵は門司港より乗船し、釜山へ向かった。上陸し、また車中の人となり、十日間もたったであろうか、満州ハイラルに着いた。当時、一八部隊は移動しておらず、駅近くの通信隊に入る。そして昭和二十年四月、一八部隊の後に我々の部隊は移動し、満州第三六二部隊として日夜訓練に励んだ。初年兵の教育は実に厳しく、毎日毎日たたかれ、そして、今夜はこれでよしと安心して

眠ったことも思い出す。

昭和二十年六月、ハイラル三六二部隊より山神府の下士官候補者隊に派遣され、あと十日で卒業、教育も終わり原隊に帰ることを楽しみにしていた途端、ソ連との開戦となり、原隊に帰れず、戦闘に参加した。

我々の部隊は山神府より孫呉へ後退し、八月十七日朝まで戦闘は続いた。我々初年兵には終戦もわからず、八月十八日だったかと思うが、武装解除を受ける。約一カ月たったか後にシベリアへとすべて歩いて、九月の中ごろ、山中のシマノフスクラーゲリに着いた。

全く雨風をしのごだけの家で、毎日作業は伐採で実に厳しく、食糧は少々で、ダワイダワイの毎日。だれもが疲れ果て、体力もなくなっていた。そして入浴もできず、体にシラミもわいて、その哀れさは今も思い出し、ぞっとする思いである。

かかる生活の中、病人が出、死亡する人、入院する人、そして作業は毎日続いた。そのうち自分の体力もなくなり、入院する。クイブシェフカ病院約二カ月間のうち約一カ月ぐらいは皆の食事の世話で、大変元氣

になったが、そこに軍隊当時の班長殿が病気で入院してきた。自分は精いっぱいお世話をした。班長殿も数日で元気になり、それぞれまた各ラーゲリへと別れた。

自分も退院し、ブラゴエシチェンスクララーゲリに行った。そこは製材と木工の工場であった。今思えば運がよかったのか、作業は工場のボイラー焚きで、零下四〇度の中、シャツ一枚で作業をした。しかし、作業はつらかった。車十台分の薪を焚いたのだった。作業はソ連人二人と自分で三人、三交代で、夜中に作業に行くこともしばしばだった。作業は大変厳しく、食糧は少々で、七十四キロあった自分の体重も五十四キロとなった。

収容所内での民主運動、共産主義教育は毎晩毎晩、それはもう厳しい指導を受けたものだ。中には、その厳しさに耐えかねて泣き出すような者もいた。

収容所内で日本人同士が、ソ連の政治部員に対していろいろ悪いことの密告をするという話は、余り気づいていなかった。

作業は厳しくて、一〇〇%ノルマを達成しないと食糧も与えないというような状態で、もうすべての人が大変参っていました。

昭和二十三年十月、ふるさとへ帰った。栄養失調で過酷なノルマで、虫けら同然で死んでいった抑留者の友を今思えば、本当にかわいそうで、日本全国から集まって慰霊訪問に毎年行っております。当時のことが思い出されて、墓地に行ったら慰霊祭をしますが、涙して墓参をやっております。一カ所に一千人余の墓地もあり、戦友の霊を慰めずにはいられない。そして、早く戦友の骨をふるさとへ連れて帰ろうと思わずにはいられない。

とにかく忘れることのできない状態だった。一方的にソ連軍が不可侵条約を破り、満州に侵入し、日本人同胞が罪もなく暴行、略奪、強姦、虐殺され、遠くシベリアで強制的重労働を課せられ、異国の果てに死んでいったことを、国もマスコミも、世間より風化されんとしている今日だが、その惨状は例えようのないありさまであった。この事実を証言者の証言で明らかで

あり、その屈辱は決して忘却してはならない。親が子供に伝え、子供が孫に伝えることこそが国民のためであると思う。